

用も検討している。しかし、その取り扱いに一定の見解はなく、症例の蓄積が必要である。

2 胃憩室による偽副腎腫瘍の1例

宗田 聡・石澤 正博・山田 貴徳
新潟市民病院内分泌代謝科

症例は68歳、男性。胸部CT撮影した際に偶発的に左副腎腫瘍(16.7mm)を認めた。診断目的に当科を受診した。

【身体所見】BMI 24.5, 血圧 110/60 mmHg. 浮腫, 満月様顔貌などは認めない。

【経過】cortisol 11.5 μ g/dl, ACTH 27.6pg/ml, メタネフリン 0.08mg/day, ノルメタネフリン 0.24mg/day, PAC 52.8 pg/ml, PRA 0.9 ng/ml/hr, デキサメタゾン 1mg 抑制試験では cortisol 0.79 μ g/dl. 以上の結果から非機能性副腎腫瘍と診断した。1年後再検査したCT画像で左副腎と思われた腫瘍の内部に air density が認められ、胃との連続性が疑われた。胃X線検査を施行したところ、胃穹隆部小弯後壁に憩室を認め、胃憩室による偽副腎腫瘍と診断した。

【考案】胃憩室の発生頻度は0.03～0.3%と低く、副腎腫瘍との鑑別が問題となることは稀である。不必要な手術のリスクを避けるべく、左副腎腫瘍の診断の際には胃憩室に注意を払うべきである。

3 当院における腹腔鏡下副腎摘除術：20年間の統計

信下 智広・鳥羽 智貴・笠原 隆
新井 啓・西山 勉・高橋 公太
新潟大学医歯学総合病院
腎泌尿器科病態学部門

【目的】当院は1992年1月に世界で初めて腹腔鏡下副腎摘除術を施行した施設である。この20年間における、世界での初症例から現在までの症例を報告する。

【対象と方法】1992年1月から2010年7月の間に腹腔鏡下副腎摘除術を施行した209例を対

象とした。男女比は87：123。年齢は平均51.0歳(12～81歳)。右102例, 左86例, 両側21例(一期的手術1例, 二期的手術5例, 片側のみの手術9例)であった。原発性アルドステロン症82例, Cushing症候群43例, 褐色細胞腫31例(悪性褐色細胞腫3例), 副腎癌3例, ACTH産生腫瘍6例, ACTH非依存性大結節副腎皮質過形成5例, テストステロン産生腫瘍1例, 非機能腫瘍39例であった。

【結果】手術時間の平均192.6分(64～572分)。出血量の中央値は50ml(小量～3,740ml)。経腹膜到達法24例, 後腹膜到達法186例。合併症として500ml以上の出血13例, 肝損傷1例, 脾損傷1例, 脾損傷1例, 小腸損傷1例, 術後洞停止1例, 皮下気腫1例を認めた。

【結語】当院での20年間で行った209例の腹腔鏡下副腎摘除術の手術統計を考察した。

4 女性化乳房の精査でみつかったアンドロゲン不応症の1例

鈴木 亮・本間 丈成*・佐藤 英利
小川 洋平・長崎 啓祐・菊池 透
新潟大学医歯学総合病院小児科
下越病院小児科*

女性化乳房は良性的乳腺組織の増生からなり、思春期男児の約6割で見られる生理的な現象であるが、時に基礎疾患を有していることがある。今回我々は、アンドロゲン不応が示唆された思春期女性化乳房の1例を経験した。

症状の遷延や家族歴を有する女性化乳房では、基礎疾患の有無について精査が必要である。

5 43年間放置されていた特発性中枢性尿崩症の1例

鈴木 克典
済生会新潟第二病院代謝・内分泌内科

症例は61歳、女性。主訴は口渇、多飲、多尿。

【現病歴】生来健康。1969年(20歳時)、口渇、多飲、多尿を主訴に岐阜県某総合病院を受診。